

微笑庵便り 2019年8月号

彩色するにあたり、どんな画材で行うかはとても重要なことなのですが、この仏頭、髪は岩絵の具という事になり、まずは合宿に行く前に買いに行くことになりました。岩絵の具は日本画などの画材を扱うところで手に入ります。彩色は初めてだったのでその時に初めて渋谷のウエマツという店を教えてもらいました。(以来紙、筆、絵の具など、絵や書に関するもの等は大体そこで調達しています。) 話を元に戻して、岩絵の具というのは天然なら、要は赤＝ルビー、青＝ラピスラズリ、緑＝マラカイトなど宝石にあたるような石を細かく砕いたもの、したがってものすごく高価です。(現在では合成、新岩など人工的な安価なものも手に入るようになりました。) 店にはガラスの瓶に入って、1色ごとにグラデーションで並んでいます。基本は鉱物を砕いたものと理解していただければわかると思いますが、その粉碎した粒の大きさにより色が変わります。当然粒子が大きい方が鉱石に近い鮮やかな色をしており、細くなるほどに白みがかっていきます。1～13位までの番号がついており、数字の大きい方が白っぽく一番細かいものは白(ビヤク)とよばれます。当時観音の髪用には群青の8番を求めました。

岩絵の具は基本鉱石ですので、どれほど粒子が細かくても水には溶けません。そのため膠などを用いて定着させるのですが、溶けないため、その粒だちというか、テクスチャーは独特で、また退色などもしませんので、日本画や仏像、仏画などに古来から使われているものです。

岩絵の具の定着には普通は膠を使いますが、その時はカシューを使いました。“カシュー”という名前になじみのある方はあまりいないかもしれませんが、人工漆という感じのもので、とても粘度があり、粘着力が強く塗った後に厚みがでて、完全に漆のようになります。天然の漆を使った漆器はものすごく高価ですが、現在の普及品の多くはカシューが使われているようです。

岩絵の具群青と、カシューを持って合宿に参加、まずは肌の部分を塗ることから始まりました。絵具と定着材の相性はとても重要で、髪の部分に膠を使うのなら、当然顔は胡粉で仕上げるつもりでいたのですが、そちらが油性の人工的なものになりましたので、肌のほうも胡粉ではなく、“ネオカラー”を使いました。小さい人形程度のサイズだと、胡粉液の中にトポツと漬けたりするのですが、このサイズだととてもそんなことのできる大きさではなく、刷毛で何回か塗り重ねていきました。白に黄と朱を混ぜれば基本的な肌色は作れます。そのあたりは人形で経験済みなので、ほぼ問題なく進みました。でも、その後、髪を塗る段になって、エライことになってしまいました。

